

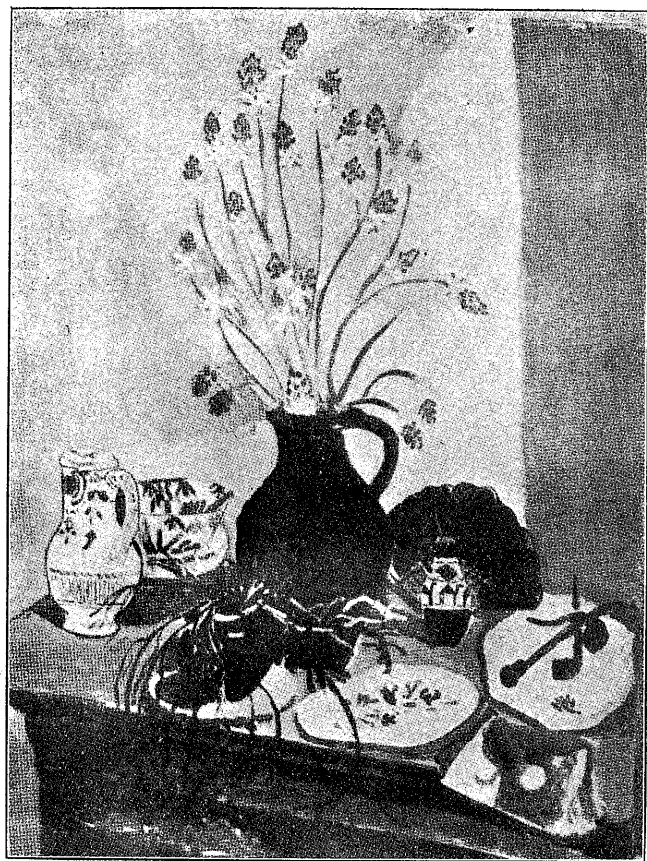
# アンリ・マチス事ども

山下新太郎氏談

しつかりした事は云へないがアンリ・マチスは現今四十前後の人だと思ふ。フランス畫壇に於ける花形役者で、サロン・ド・オトムヌの驍將である。コルモンの畫室に學んだ事もある。云ふまでもなく大いにアムブレツシヨニストの感化を受けてゐる。この人だけの作品展覽會が今年の春パリイに開かれて、それへは私も行つて見た。非常に奇抜なものばかり出てゐるが、本國に於いても今の處評判は區々なので、馬鹿に讃め上げる人もあれば馬鹿に貶す人もあるのだ。でまあ、讃める側の或人の説を云つて見れば、マチスと云ふ人は非常に才能のある畫家だ。彼は大いにセザンヌに私淑してゐるが、セザンヌの方は寧ろ不器用なのを、本當に眞面目に一生懸命になつて研究した結果あつ

いふ畫が出来たのである。マチスは生來は器用な人なのだから、あんな畫を描いたのは自然の結果といふよりも、力めて描いたのだらうといふ事である。

どういふものかマチスの渴仰者はフランス本國よりも、却つてスカンデナヴィア、デンマク、或はロシア邊に多い。殊にモスコオでは屢々マチスの作品展覽會が催はされた。要するに彼の畫は北歐の人に愛せられる傾きを有してゐる。一體今迄北歐の美術といふものは一般に時代遅れの觀があつたものだが、近頃になつては却々大家が出て来るやうになつた。長い間の眠から急に眼醒めたやうなもので、その反動かして却つて西歐最新の風潮を喜ぶ傾きがある。話は少し飛ぶがたとへばアンドン・ゾルン、この人はスエデンの畫家だが頗るフランスの畫を喜んでゐる。エツチングに巧みで、エツチャアとしてはレムブランド以後の大家だと言へ云はれてゐる。



静物 マチス筆

同じやうな原因でアメリカ人が又マチスの作を喜ぶ。マチスの畫室がパリイに出来た時、そこへ集つたものの大部分はアメリカ人でその次がスカンデナヴィアやロシアの學生であつたさうだ。この畫室内に於ける生徒の研究の仕様が却々振つてるさうで、たとへば大きな顔を描いて、それに釣合の取れないやうな小さな手足を附けて生徒は平氣である。それが悪戯かと思ふに決して悪戯でも洒落でもない。飽くまで眞面目でやつてゐる



少女 マチス筆

のだ。事實はどうであらうとその時その時の感じに忠なれといふのが彼等の主義なのである。マチス自身もいつも眞面目に觀察しなければいけないと云つてゐるさうだ。

前にも云つた通り藝術家としてのマチスの評價はまだ定まつてはゐない。そこへ行くとセザンヌには大凡もう定評があつて、今日では印象派の畫家として動かす事の出来ない一人となつてゐる。マチスとセザンヌとを比較して見ると、セザンヌは畫に就いての學校教育は九で受けてゐない。彼のテクニクは全く自分自身で作りに上げたのである。渾身の力を自己の作中に注ぎ込んでやつたから、あの通り從來の畫家の作に見る事の出来ない嶄新な手法が得られたのである。實際セザンヌの作には一種云ふ可らざる邊に人を牽き付ける力がある。たとへばどうにかして對稱物の心持を出さうとして一個處を塗り塗りにした結果は、繪具が高く盛り上つてゐるやうな部分があるが、決して色が混濁しないで、實に好く油繪具その物の美を發揮してゐる。そこが彼の畫の人を牽き付ける處である。セザンヌの畫を一語にして盡せば「觀察の

『マルゲリットの像』



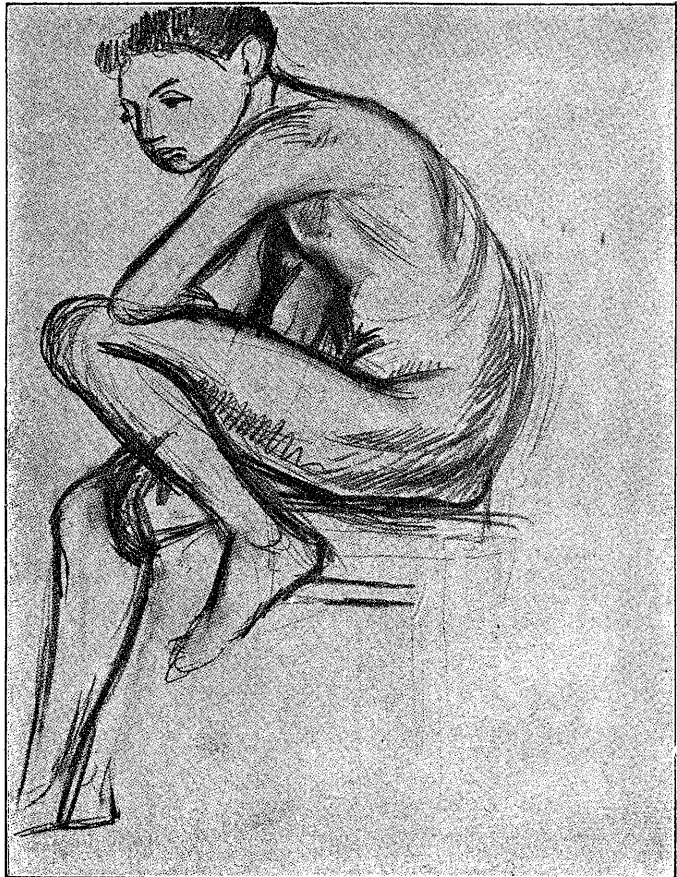
マチス筆

意して、随分刺戟の強い激烈な色が使つてある。中にはあんな書は己にだつて描けると冷笑する人もあるが却々どうして出来るものではない。普通の人間では逆もあんなに思ひ切つた極端な事はなご得られぬ。併しマチスといふ人にとつかりした技術の根底があるといふ事は、今年その作品展覧會に彼の初期の作として出陳されたものを見て分つた。それはクロオド・モノの初期の作そのまゝとも思はれる様な書だが、私はその巧いのに驚いた。印象派が忌む處の黒も使つてある。一體モノばかりでなく、シスレエにしてもピサロに

て置いて、今度は少しボンナアルの事を云つて見よう。この人の作品展覧會も、マチスの次に次いでパリイに開かれたが、彼はセザンヌなどは質を異にして性來好く出来る方の側に入る人だ。云ふまでもなくアムブレッシヨニストの一派に屬すべき畫家で、畫室へは學生を集めて教へてゐる。穩健な書を描く人だから普通の人も分り易い。矢張り色に重きを置く主義で、その點では頗る人をチャアムさせる力を持つてゐる畫だ。デッサンは勉強さへすれば達する事が出来るが、色彩に對する感じは學んで得られるものではない、それはその人の根本の趣味から來てゐるものだと言へる人がある。私にはどうもこの説が事實のやうに思はれるので、上品な趣味を持つてゐる人の書には上品な色が出て來るし、野卑な趣味を持つてゐる人の書には野卑な色が出て來るやうに思ふ。ボンナアルは色彩に對する一種の好い感じを持つてゐる人

鋭い」といふ事にある。あのテクニクもその鋭い觀察の結果から來てゐるのである。  
マチスはセザンヌとは事變り、畫に就いての學校教育は充分受けてゐる。あんな書を描くのは何となく好んで描くやうに思はれる。併しフランス人だとしてさうくマチスを非難ばかりもしてゐないので、現在は如何やうであるにもせよ、將來に於いて必ず何物かを生み出すに違ひないとは皆人の一致する處である、兎に角彼がセザンヌの感化を受けてゐるといふ事は疑のない事實である。  
マチスの畫は非常に鮮明な色で出來てゐる。さういふ色でベタ／＼大膽に塗潰してある。併し西洋人の作だけに決して平板な感じを與へない。充分に深みがある。一體に色彩を大きく見て、細々した處は捨てて顧みない。色の對照といふ事に注

い時分には随分黒を使つたものだ。それは彼等が源をコロオに發してゐるからでコロオは大いに黒を愛用した人だ。固より彼等は黒を黒として使つてゐるのではなく、それを巧に用ひて快い銀鼠色を出してゐる。マチスもそれは同じ事である。さうして彼のその畫は筆力も甚だ勇健だ。これを見ても彼の技術上の素養が決していふ加減のものではないといふ事は分る。  
マチスの事はその位にし



習作 マチス筆

で、その描かれた作品の色感も自づから心持が好い。併しこの人の畫は穩健なだけにマチス程の社會的反應はない。従つて又別に激しい非難の聲にも遭遇しない。

話が又元へ戻るやうであるが、セザンヌの畫には實際惹き付けられる處がある。併しマチスの作は、有體に云へば私にはその面白味は充分にわかない。が、繪具の用法の巧みな事には感服せざるを得ぬ。決して無意味に繪具がなすくつてあるのではない。布の上へ繪具を置いて行く、その置方が實に巧い。一體歐洲の畫家は繪具といふ材料その物の美を尊重する念が甚だ厚い。これに反して日本人の描いた油繪などを見ると、少しもこの繪具の美なるものが發揮されてゐない。別にそれを無視する譯ではあるまいが、恐らくまださういふ細かい點へ注意を向けるまでに達してゐないのだらう。一體油繪具は使用するに却々困難なもので、決して日本畫家が憶測してゐるやうな便利なものではない。西洋の畫家は如何にしてこの繪具特有の美を發揮せんに苦心してゐる。油繪にして油繪具の美を發揮する事が出来なかつたら、その畫は到底立派な作品を以て許す事は出来ない。その代り油繪具が充分その特有の美を發揮するやうに使用されれば、これ程又美なものもなからう詰り畫家の一面の努力は油繪具それ自身の持つてゐる美を崩さずに用ひるといふ處にあるのだ。セザンヌやマチスの畫はそれが好く成功してゐる。それだから何とも云へない美しい感じを觀者に與へる事となるのである。

(紙面の都合に依りボンナアルの作は次號に掲載すべし—記者)

## スカアゲン

ジュットランドの

デンマアク畫家村

清見 陸 郎 譯

他の國で生れ、他の國で育つたにも拘はらず、スカアゲンに對して屢々ホオムシツクを感ずるのを、私は自分ながら不思議な事に思つてゐる。私がこのジュウトの漁村の蠱惑の下にあつてより以來もう幾年か経つ。併しながらその記憶は、都市の喧騒と醜惡との間に在つても眼には見えないが宛もそこに現存せるかの如く感じ得られる程、それ程私にはハッキリしてゐる。紫ばめる沼地は私の心に休息を與へる。太陽の光線に浴せる砂丘の清しさ、潮風に水煙、それから北海とバルチック海とが相撃つ「グレエネン」の止みなきざよめ

このスカアゲンは、それは又不思議な位「北方」である。コペンハーゲンの北、フレデリックスマスハヴンの北、海と海との間に包まれた砂山の窪みにある沼地を越した北。海賊の子孫にして、他の人間よりも一層深く海の生活を理解せんと欲するデンマアクの畫家に取つては、これは誠に適當なる仕事場である。

私は世界の端かと思はれるやうな場處への道を指さす淋しい途中驛を過ぎ、大きな暗黒の荒廢地を突進した時には、何だか特殊な經驗でも得られるやうな

感じが初めからした。さうしてその的は外れなかつたのである。

それは先づブレンツムの旅館に於いて始まつた。その時戸は暗い庭に向つて八文字に開かれ、鏡板の嵌まつた繪壁を背景にした前には、黄色な頤髭を生やしたブレンツム自身の愉快さうな顔が現れた。彼の歡迎には旅籠などには稀に見る處の威嚴と親密との心地好い融和の様が現はれてゐて、私は何だか長い漂泊の後自分の家へでも版つて來たやうな氣がした。それから私が自分の部屋の上立つた時には、驚歎は愈々増して、世を離れた天涯の一角にも、かくまで私の氣に入つた休息の場處が発見し得られるものかと思はれるばかりであつた。不規則な破風や屋根窓、磨かれ床、鋼鐵の蝶番が附いた怪奇な粗硬な綠色の家具た緑や薔薇色をした古風な更紗木綿の帷帳、それらは衣裝臺の鏡に反射する、二つの高い銅の燭臺から發する軟かい光に依つて照らされてゐた。何物か能くこの白い部屋の魅力に敵し得よう。



山下新太郎 筆 『讀書の後』